



# 志度高だより 一飛翔の窓

第94号  
(H22.5.15)

「ガー吾とガー子」

彼らはある日突然現れて、ある日忽然と姿を消した。

それはちょうど田植えが終わった5月の中旬のことだった。子供たちと年金犬の散歩をさせていると、どこからともなくガーガーという嘎れた声が聞こえてきた。最初は空耳かと思った。水の張られた水田に早苗が幾何学的に広がっている。鏡面化した水面に青空のかけらが散らばっていた。長閑だ。この長閑さを破るような嘎れ声などどこにも存在するわけない。そうだと、と年金犬に問いかける。だが、血気盛んな彼は耳をレーダーのアンテナみたいにピーンと立て、何やら一点を注視している。息遣いも少々荒い。警戒態勢に入ったときのポーズだ。首紐を引くと、「邪魔するな。今、大事なところだ」と言わんばかりに白い目でこちらを睨んでくる。

調子に乗るな。そんな態度取らんだったら国犬年金打ち切るぞ。そう思って、もう一度紐をぐいとやろうとしたとき、またしてもガーガーときた。声のした方を見やるが、姿はない。一方、年金犬はといえば、クーンクーンと歯痒い鳴き声を発しながら、しきりに前足で草を搔いて紐をぐいぐい引っ張る。手元を緩めると、弾かれたように走り出した。

彼らは水路にいた。「あっアヒル！」子供たちは大はしゃぎ。かたや年金犬は不倶戴天の敵に遭遇したみたいに、背中をぐいと押し上げ、尻尾をぐるぐる巻きにして左右に激しく揺さぶっている。ウーウーと威嚇の声さえ上げ、アドレナリン全開だ。「相手はアヒルだぞ。そう興奮するなって」でもいったいどこから来たのだろう。我が家のすぐ横には二級河川が流れていて、その両脇に水田が広がっている。もしかすると、川を流れてきてそれが水田に……。

その日を境に毎朝アヒル探しが始まった。彼らは日によって場所は異なるものの、たいていヨモギが青々と茂る畦の上において日光浴をしていた。二羽はいつも一緒だった。ガー吾とガー子。これが子供たちがつけた名前である。ガー吾は茶色でガー子は白鳥のように真っ白だった。体はガー吾がはるかに大きく、つねにガー子を守っているという印象を受けた。当初彼らを見ると俄然男気を見せていた年金犬も、アヒル探しが朝の日課になり、子供たちの注意がもっぱらアヒルに行くと、面白くないとばかりに次第にトーンが下がっていった。

稲が私たちの腰を越えるまでに成長すると、自然アヒルの姿は見えなくなり、彼らの姿を見つけるのが難しくなった。ところが驚いたことに、年金犬が妙な行動に出た。姿が見えないアヒルに向かって、ワンと吠えたのである。すると、一瞬を置いて青々と茂った稲の間からガーガーと例の嘎れ声が聞こえてきたのである。翌日から、それが新しい朝の日課になった。この頃には、彼らは『小塚さん』と呼ばれる田んぼの中のこんもりした塚の上にあった。後になって分かったのだが、『小塚さん』は水に没することがなく、彼らはそこに卵を産んだのである。田んぼの持ち主のおじさんがそう教えてくれた。

私たちは卵が孵化する日を楽しみにしていた。町内のケーブルテレビもこの話を聞きつけ取材に来た。ちょうど私たちが散歩しているときで、私たちもインタビューを受けそうになったが、年金犬が凶暴性を発揮してカメラに吠えついたので実現しなかった。年金犬にしてみれば、主役はあくまで彼でアヒルではない、そう言いたかったのだろう。

ケーブルテレビがアヒルのことを放映したので、土日になると家族連れがやってきて、アヒルの周囲は少し騒々しくなった。それでも誰もが二世誕生を心待ちにしていたことは間違いない。しかしそ夢は叶わなかった。卵は蛇に呑まれ、孵化することはなかった。

秋の気配が濃くなり稲穂が黄金色に輝く頃、彼らは忽然と姿を消した。年金犬はそうとも知らず、『小塚さん』の前に来ると、いつものようにワンと吠えた。しかし、ガーガーという返事は返ってこなかった。それが何日か続くと、年金犬もしょんぼりして吠えるのをやめてしまった。あまりに落胆しているので、「お前まさか淋しいんじゃないか……」とからかうと、「へん、そんなことあるもんか。俺はこう見えても由緒正しい血筋のシーズ犬だ。見損なうんじゃない」と強がった。「かつては迷い犬。そして今は国犬年金で暮らす怠け者」もう一発ジャブをかましてやった。日頃のお返しだ。「あんたは一言多いんだって、いつも」そう言って白目を剥いた。

先日、連休を利用して子供たちが帰省した。当然のごとく散歩に出た。老齡年金に切り替えた年金犬の足取りは重い。そこに突然雲雀が麦の間から飛び出てきた。ピーピーピーッ。老犬はかつてそうしたように耳をそば立てた。「マル、あれは雲雀よ。アヒルじゃないの」娘が言うと、彼の目が遠く昔を思いやる眼差しに変わった。ガー吾とガー子が姿を消して13年の歳月が流れた。

